

## ■学童野球に飛び込んで =塚本樺雄さん=



69年経済学部卒の塚本樺雄さんは38年前から今日まで学童野球の指導者として活躍されています。40歳の時、小3の息子さんの所属チームでコーチとしてお手伝いされたのが始まりとのことです。

《 もともと私の野球は誰に教わった訳ではありません。自分で勉強し、子供達に野球を教えたいというより一緒になって練習をしていたというのが正しいかもしれません。》

その後監督を経てチームの代表者となり、2017年には船橋市32チームの頂点に立ちます。

《 優勝決定の後、野球協会の会長が真っ先に私の所に駆け寄り握手をして下さいました。流石に私も嬉しくて危うく涙がこぼれそうでした。》

さらに審判員としても活躍されています(船橋市野球協会学童野球所属の審判として加盟)。

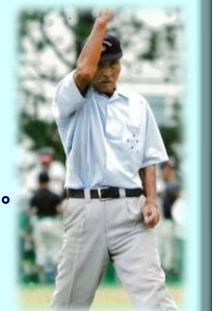
《 テレビで野球を観ている試合の勝敗より審判、特に球審の動きに目が行ってしまいます。そうこうしているうちに支部の審判長に祭り上げられ、益々審判が好きになりました。》

《 “子供達の可能性は素晴らしい!!” 兎に角、褒めてあげることです。『プロでもエラーはする。三振だってする。子供達は当たり前!』コーチや応援に来ている方々に『どうか家に帰っても子供を怒らず、良いプレーをしたら褒めてやって下さい。』と、それが私の口癖となりました。》

今は、チームの代表や協会の審判も退き、チームの応援を楽しんでいるそうです。



右から2人目が塚本さん



## ■プサルタリーに魅せられて =佐藤(福岡)知津子さん=

73年英文科卒の佐藤(福岡)知津子さんは、趣味で始めたプサルタリー演奏にはまっています。今では年に数回開催されるコンサートに出演し、プサルタリーの楽しさをお友達やお知り合いの方々に広めています。

プサルタリーは楽器の一種で、古代ギリシャ時代からあったとされ、聖書にも登場する木製弦楽器です。多くは三角形の木の台に弦が張っており、指や弓で弾きます。一般に楽器店ではあまり販売しておらず、佐藤さん

のプサルタリーは佐藤さんの恩師が手造りされたものだそうです。

バイオリンのように弓で弾いたり、ハープのように演奏するなど様々な奏法があり、音色はバイオリンより優しく心を癒してくれるとのこと。弦は中央から右にピアノの白鍵の音、左に黒鍵の音が配列されていて、初心者もすぐに楽しめるとのこと。

《 18年ほど前に知人からコンサートに誘われ、そこで初めてプサルタリーに出会い優しい音色に感動、すぐにレッスンを始めました。音も強すぎず、体と心にそっと寄り添ってくれるように繊細。クラシックやポピュラー、懐かしい日本の歌や演歌など、どのジャンルの曲にも合い、虹のように違う音色を響かせます。初心者でも少し練習すれば、一人でも仲間とでも楽しめます。》

写真は7月3日に取手で開催された『プサルタリー&ギターコンサート』の様です。



## ■しらゆり幼稚園 「卒園記念に陶製お面」 =吉羽(周藤)克彦さん=

77年史学科卒の吉羽(周藤)克彦さんが理事長を務める「しらゆり幼稚園」(茨城県古河市)では、約27年前から卒園児が作る陶製のお面を保管し、アートギャラリーに展示しています。その様様が毎日新聞(3月31日付)で紹介されました。記事要旨は次のとおりです。

『しらゆり幼稚園で卒園児の恒例行事、陶製のお面作りが行われた。園内のアートギャラリーにはこれまで作られた全作品約二千点が展示されている。今年の卒園児

80人が陶芸用粘土を思い思いの形にこねてうわぐすりを塗り、吉羽理事長が園の自前の電気窯で18時間かけて焼き上げた。95年から卒園記念のお面の制作を始め吉羽さん自らも作陶、全国の窯元を巡ったという。園児の作品について「生まれながらの感性、素直さが表現され、ピカソも顔負けの作品ばかり。大人になっても見返しに来て、子供の頃の素直さを思い出してほしい」と話した。』

《 古美研の夏合宿で河井寛次郎記念館や信楽焼の窯元を見学する機会があり、また作陶家のお宅で茶碗を作らせて頂いた経験などを生かし可愛い子どもたちの作品を焼かせて頂いています。》

古美研での活動や経験が、未来を担う子どもたちのために生かされているなんて、素敵なお話ですね!

